

## ホームヘルパーの自己成長感に関連する要因

—個別ケアの実践度に焦点をあてて—

ヒロセ ミチヨ  
広瀬 美千代\*

**目的** 在宅介護においてホームヘルパーは、非常にストレスフルな状況にあるといえるが、ネガティブな状況下においても学びや成長を感じる等の肯定的な側面を見いだしているかといった価値的側面を探求することが求められる。本研究においては、ホームヘルパーの自己成長感に関する要因を適切なアセスメントと突発的な支援ができるという個別ケアに焦点をあてて検討することを目的とした。

**方法** A県内の訪問介護事業所から無作為抽出した、600名を対象とする自記式郵送調査を行った。調査票の有効回収数は149通、有効回収率は24.8%となった。質問項目は「自己成長感」、性別、年齢、ヘルパー経験年数、仕事継続意識、および「新たな気づきと突発的支援」であった。統計分析においては「自己成長感」について、「新たな気づきと突発的支援」を潜在変数とする1因子モデルを設定し、確証的因子分析を行った。また、構造方程式モデルを用いて適合度と各変数間の関連性を確認した。

**結果** 欠損値のない131人のデータを用いて、「自己成長感」3項目および「新たな気づきと突発的支援」7項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて確証的因子分析を実施した結果、統計学的な水準を満たし、構成概念妥当性が支持された。また、「新たな気づきと突発的支援」が「自己成長感」を規定するとした因果関係モデルのデータに対する適合度は、 $\chi^2(df) = 73.863(72)$ , RMSEA = 0.014, CFI = 0.999と統計学的な許容水準を満たしていた。また、尺度のCronbachの $\alpha$ 係数は、すべての因子において0.870以上を示した。さらにヘルパーの経験年数と「新たな気づきと突発的支援」、仕事継続意識と「自己成長感」の間には、有意な関連が確認された。

**結論** 本研究におけるホームヘルパーの「自己成長感」は、信頼性と構成概念妥当性が得られたことから尺度として使用可能であると判断した。また、「新たな気づきと突発的支援」は「自己成長感」と関連がみられた。本研究結果から、ヘルパーとしての経験を積み、様々な気づきを通じて突発的な対処能力が高まることで個別ケアが可能となると、学びや成長を自覚していく可能性があることが示唆された。今後の課題としては因果関係の明瞭さを高めるため、質問項目を吟味し、調査対象者を拡大して実施することが求められる。

**キーワード** ホームヘルパー、自己成長感、個別ケア、ヘルパー経験年数、仕事継続意識、構造方程式モデリング

### I はじめに

わが国では予想以上の独居高齢者や支援が必

要な高齢者の増加により、ホームヘルパーへの需要は年々高まる一方である。ホームヘルパーは在宅介護サービスの担い手として重要な存在であるが、感情労働<sup>1)</sup>特有の利用者との関係<sup>2)</sup>や役割葛藤<sup>3)</sup>など、処遇面の問題なども含めて

\* 関西福祉科学大学社会福祉学部准教授

非常にストレスフルな状況<sup>4)</sup>に置かれているといえる。

一方、ホームヘルパーの心理的側面に関する研究は、否定的な側面が強調されがちであったが、やりがい<sup>5)</sup>に関する研究も見られる。介護者全般に関する研究の領域では、self-growth (自己成長)、meaning (意味づけ)、self-esteem (自信や満足感) など、近年の介護に対する肯定的な認識に関して様々な概念が検討されている<sup>6)-8)</sup>。このことから、介護職の仕事継続の要因は職場としての条件より、それに対して満足しているか、肯定的な側面を見いだせているかといった価値的側面を探求することが求められるといえる。

このような肯定的な視座の中でも、楽観性<sup>9)10)</sup>やネガティブな出来事やストレスフルな経験から生じる成長の認識に関する報告<sup>11)</sup>がみられる。信野<sup>11)</sup>は、自己成長感を「ストレスフルな出来事のあとに生じる自分が成長したと感じる感覚」と定義し尺度開発を行っている。ケアする者の自己成長感に関する先行研究に関しては、陶山ら<sup>12)</sup>は「自己成長感」が介護に対するストレス対処行動に関連すると指摘しているが、櫻井<sup>13)</sup>は介護者自身の信念や人生の目標の次元と関わる要素を持つとし、これ以降は介護者のストレンクス視点として、介護を学びや成長の場として捉えるという報告もみられる<sup>14)</sup>。

しかしながら、CiNiiの検索サイトにおけるホームヘルパーの心理的側面を概観すると、肯定的側面に関する研究は非常に少なく、自己成長感に関する研究は報告されていない。このような成長の認識は時間的推移を経て自覚されるものであり、単なるストレスへの対処ではなく、どのような状況であっても学びや成長を感じることができるかといった長期的な視座で描かれていることから、ホームヘルパーの仕事継続という点において探求されるべき概念であると考える。

他方、ホームヘルパーは利用者との関係に困難を抱きながらも、利用者の身体および生活状況を的確にアセスメントし、利用者の心情を理解する必要がある。また、そのアセスメントに

基づいたニーズを抽出することで、個別的なケアを担うことが求められる。この介護のアセスメントに関しては、2007年の法改正<sup>15)</sup>にて、介護の定義を「入浴、排せつ、食事その他の介護」から「認知症等の心身の状況に応じた介護」と修正し、認知症など様々な症状の要介護者に対応できるようになった。このことにより、介護福祉の分野では、環境因子や個人因子なども含めた個別ケアの視点が重視されることとなった<sup>16)</sup>。

以上のことを背景として、本研究ではホームヘルパーの業務に対しても肯定的な指標として「自己の学びや成長」を取り上げ、また厚生労働省が着目している「個別ケア」に関する実践<sup>17)</sup>にも焦点をあてたいと考える。よって本研究では、ホームヘルパーの「自己成長感」に焦点をあて、適切なアセスメントと突発的な支援ができるという個別ケアの実践度との関連を検討することを目的とした。

## Ⅱ 研究方法

### (1) 調査対象および方法

調査対象者は、A県内の訪問介護事業所に勤務するホームヘルパーとした。WAM-NETに2013年4月時点で掲載されていた情報を基に、A県内の全訪問介護事業所から300カ所を無作為抽出し、各事業所に2通ずつ計600通の調査票を配付した。調査票は無記名自記式とし、記入後は回答者が自ら返信用封筒に厳封した後、研究責任者宛に返送する方法を採った。なお、調査期間は2013年5月1日から同月31日までとした。

### (2) 調査内容

#### 1) 「自己成長感」

「自己成長感」に関しては、「ヘルパー業務楽観的態度」尺度<sup>6)</sup>の下位概念を用いることとした。本尺度は、ホームヘルパーが業務上起こりうる困難な事象に対してもつ、楽観的な態度や問題を前向きに解決しようとする意識としてその概念を測定するために開発されたものであ

り<sup>17)</sup>、「困難の楽観的解釈：7項目」「自己成長感：3項目」「人生における利得感：5項目」の計15項目で構成されている。この楽観性はSeligman<sup>18)</sup>のいう困難な状況を「一時的」で「特定の」であると見なす説明モデルに、さらにその中でホームヘルパーが認識している肯定的な評価や価値を見いだす姿勢を追加し、時間的な幅を持つ概念に設定されている。これらを下位概念とする3因子二次因子モデルは、構造方程式モデリングを用いた確認的因子分析により、構成概念妥当性が支持されている<sup>6)</sup>。「自己成長感」は、この概念の中でも、「ヘルパーの仕事をすることで学ぶことがたくさんある」「ヘルパーの仕事をすることで人間として成長したと思う」など困難状況を長期的な視座で肯定的な次元に変換していけるという概念を表している。また、自己成長感に関しては、家族介護者の精神的側面における先行研究で報告されている「自己成長感」3項目<sup>13)14)</sup>を参考にして開発されている。

## 2) 個別ケア実践度

個別ケアに関しては、「ホームヘルパーの主体的で柔軟性のある個別ケア」尺度<sup>19)</sup>を構成する下位概念のうち、「新たな気づきと突発的支援」(7項目)を使用した。この尺度は厚生労働省の「求められる介護福祉士像<sup>17)</sup>を参考に「利用者・家族・チームに対する主体的な対話や協働、柔軟性のある個別の支援」と定義を行ったものであり、その中でも「新たな気づきと突発的支援」は、特に利用者の個別性を重んじた概念であり、「利用者に慣れてくると対話しなくてもある程度、利用者の心身の調子などの様子がわかる」「利用者が急に興奮してもうまく対応している」「利用者や家族の状況で起こりうる事態を予測して業務を行っている」などの7項目によって構成されている。

回答は、「自己成長感」は、「とてもそう思う：4点」から「まったくそう思わない：1点」の4件法で、「新たな気づきと突発的支援」は「よくある：4点」から「まったくない：1点」の4件法で求めた。また、「自己成長感」や「新たな気づきと突発的支援」が高いほど得点

が高くなるように設定した。

## 3) その他の項目

その他の調査項目として、ホームヘルパーの属性・特性について、性別、年齢、ヘルパー経験年数、仕事待遇への評価、仕事継続意識を測定した。また、本研究で使用した質問項目は、高齢者福祉を専門とする研究者のエキスパートレビューを受け、内容を吟味した上で修正を行った。

## (3) 解析方法

統計解析には、当該項目に欠損値のない131人(調査対象者の22.8%、回答者の87.9%)のデータを用いた。

第一段階として、統計解析は、まず「自己成長感」の構成概念妥当性については、先行研究<sup>6)</sup>に従い1因子モデルを設定し、WLSMV(Weighted Least Square parameter estimates using a diagonal weight matrix with robust standard errors and Mean and Variance adjusted chi-square test statistic)(以下、WLSMV)をパラメータの推定法に、構造方程式モデリングを用いて確認的因子分析を行った。

第二段階として、潜在変数とする「新たな気づきと突発的支援」因子の構成概念妥当性を検証するため、1因子モデルを設定し、WLSMVを推定方法とする構造方程式モデリング<sup>20)</sup>を用いた確認的因子分析<sup>21)</sup>を行い、データに対する適合度を検討した。なお、構造方程式モデリングで検証された因子構造を構成する観測変数を測定尺度とみなした場合の信頼性は、Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数で検討した。

第三段階の「新たな気づきと突発的支援」と「自己成長感」の関係については、看護職の自己成長感に関する要因分析を行った奥野の研究<sup>22)</sup>を参考に、「新たな気づきと突発的支援」を独立変数、「自己成長感」を従属変数とした因果関係モデルを構築した。さらに、ホームヘルパーの性別(男性：0点、女性：1点)、年齢、ヘルパー経験年数、仕事待遇への評価、仕事継続意識を統制変数として投入し、WLSMVを推定法に構造方程式モデリングを用いて、モ

デルの適合度と各変数間の関係性を検討した。

上記の構造方程式モデリングにおけるモデル適合度の評価には、 $\chi^2$ 値（以下、 $\chi^2$ ）、自由度（以下、df）、Comparative Fit Index（以下、CFI）、Root Mean Square Error of Approximation（以下、RMSEA）を用いた。 $\chi^2$ をdfで除した値（以下、 $\chi^2/df$ ）は、小さいほどモデルの

データに対する適合度が高いことを示し、CFIは一般的には0.950以上であればそのモデルがデータをよく説明していると判断される<sup>23)</sup>。またRMSEAは、0.100以上であればそのモデルを採択すべきでないといわれる<sup>24)</sup>。また、パス係数の有意性は5%水準とした。

以上の解析には、統計ソフト「IBM SPSS 23.0 for Windows」ならびに「Mplus Version 7.4」を用いた。

表1 分析対象者の基本属性 (n=131)

	人数 (%)
性別	
男性	20(15.3)
女性	111(84.7)
年齢 (平均45.9歳, 標準偏差=10.3)	
20歳代	11(8.4)
30歳代	27(20.6)
40歳代	44(33.6)
50歳代	35(26.7)
60歳代以上	14(10.7)
ヘルパー経験年数(平均6.8年, 標準偏差=3.4)	
3年未満	48(36.6)
3年以上6年未満	25(19.1)
6年以上10年未満	38(29.0)
10年以上	20(15.3)
待遇への主観的評価	
とてもよい	12(9.2)
まあいい	38(29.0)
普通	59(45.0)
あまりよくない	19(14.5)
とても悪い	3(2.3)
仕事継続意識	
できるだけ続けたい	40(30.5)
なるべく続けたい	69(52.7)
あまり続けたくない	19(14.5)
なるべくやめたい	3(2.3)

(4) 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、調査対象者に対して調査の趣旨、調査協力への自由意志（任意）の保障、匿名性の保持、研究目的以外でデータを使用しないこと等について明記し、同意を得られた場合は無記名で返送を依頼した。また、本研究は大阪市立大学大学院生活科学研究科の研究倫理委員会に申請し、2013年3月12日に審査・承認を受けて実施した（承認番号12-41）。

Ⅲ 結 果

(1) 分析対象者の属性 (表1)

分析対象者であるホームヘルパーは、女性が

表2 「ホームヘルパーの自己成長感」に関する回答分布 (n=131)

(単位 人, ( ) 内%)

	とても そう思う	まあそう思う	あまり そう思わない	まったく そう思わない
Self1 ヘルパーの仕事をするとは、今後の人生のためになると思う	85(64.9)	44(33.6)	2(1.5)	-( - )
Self2 ヘルパーの仕事をする事で学ぶことがたくさんある	72(55.0)	47(35.9)	12(9.2)	-( - )
Self3 ヘルパーの仕事をする事で人間として成長したと思う	77(58.8)	48(36.6)	6(4.6)	0(0.0)

表3 「新たな気づきと突発的支援」に関する回答分布 (n=131)

(単位 人, ( ) 内%)

	よくある	まあある	あまりない	まったくない
Em1 利用者との対話で、利用者や家族の生活上の問題や様子などについて気づくことがある	36(27.5)	88(67.2)	6(4.6)	1(0.8)
Em2 利用者へ慣れてくると対話しなくてもある程度、利用者の心身の調子などの様子がわかる	12(9.2)	88(67.2)	28(21.4)	3(2.3)
Em3 利用者や家族を見るとある程度、その家族関係や家族による介護状況が推測できる	26(19.8)	79(60.3)	23(17.6)	3(2.3)
Em4 予想できない事態にあっても目の前の利用者へ冷静に対応している	17(13.0)	84(64.1)	29(22.1)	1(0.8)
Em5 利用者が急に興奮してもうまく対応している	18(13.7)	89(67.9)	22(16.8)	2(1.5)
Em6 利用者や家族の状況で起こりうる事態を予測して業務を行っている	20(15.3)	84(64.1)	25(19.1)	2(1.5)
Em7 想定外のことに気づいても、上司や責任者に連絡してスムーズに対処している	38(29.0)	84(64.1)	9(6.9)	-( - )

111人(84.7%)であり、年齢は平均45.9±10.3歳であった。所持資格については約半数の者が介護福祉士を所持し、ヘルパーの経験年数は平均6.8±3.4年で、3年未満が3割以上を占めていた。また、約4割の者は仕事待遇に対して肯定的な評価をしていた。

(2) 「自己成長感」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「自己成長感」に関する回答分布は表2に示すとおりであった。「ヘルパーの仕事をする事は、今後の人生のためになると思う」に「とてもそう思う」と回答したものが85人(64.9%)と最も多かった。

次に「自己成長感」を1因子として3項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果、モデルのデータに対する適合度は $\chi^2(df) = 17.127(11)$ , RMSEA = 0.000, CFI = 1.000と統計学的な許容水準を満たしていた。また、当3項目による「自己成長感」を測定尺度とみなした場合の $\alpha$ 信頼性係数は0.870であった。

(3) 「新たな気づきと突発的支援」の回答分布および妥当性と信頼性の検討

「新たな気づきと突発的支援」に関する回答分布は表3に示すとおりであった。「想定外の

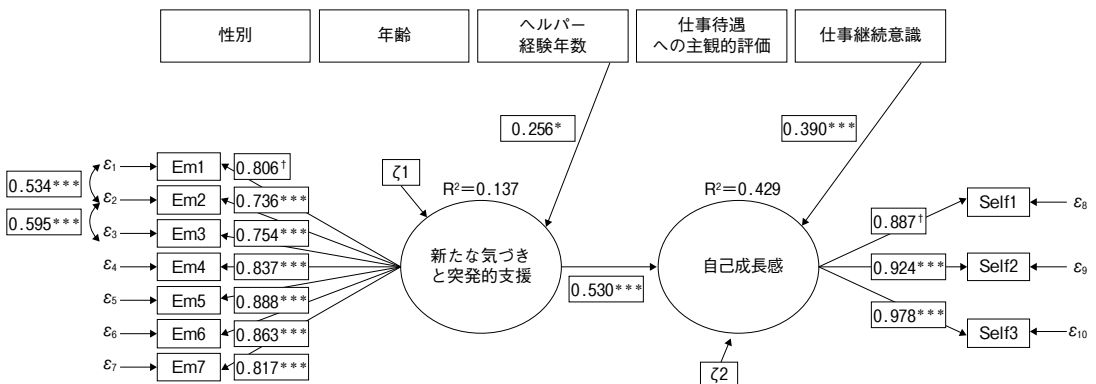
ことに出くわしても、上司や責任者に連絡してスムーズに対処している」に「よくある」と回答したものが38人(29%)と最も多かった。

「新たな気づきと突発的支援」を1因子として7項目による1因子モデルを設定し、構造方程式モデリングを用いて構成概念妥当性について検討した。その結果、モデルのデータに対する適合度は $\chi^2(df) = 43.595(14)$ , RMSEA = 0.127, CFI = 0.981と統計学的な許容水準を満たしていなかった。そこで、Mplusが算出する修正指標を参考に「利用者との対話で、利用者や家族の生活上の問題や様子などについて気づくことがある」と「利用者に慣れてくると対話しなくてもある程度、利用者の心身の調子などの様子がわかる」「利用者に慣れてくると対話しなくてもある程度、利用者の心身の調子などの様子がわかる」と「利用者や家族を見るとある程度、その家族関係や家族による介護状況が推測できる」の誤差間に共分散を認めて再度分析したところ、 $\chi^2(df) = 15.351(12)$  RMSEA = 0.046, CFI = 0.998と統計学的な許容水準を満たしていた。また、当7項目による「新たな気づきと突発的支援」を測定尺度とみなした場合の $\alpha$ 信頼性係数は0.817であった。

(4) 「新たな気づきと突発的支援」と「自己成長感」の関係 (図1)

「新たな気づきと突発的支援」が「自己成長

図1 ホームヘルパーの新たな気づきと突発的支援と自己成長感の関係 (標準化解)



注 1) n = 131 :  $\chi^2(df) = 73.863(72)$ , RMSEA = 0.014, CFI = 0.999 (推定法: WLSMV)  
 2) ε, ζは誤差変数, †はモデル識別のために制約を加えた箇所である。  
 3) \*\*\* p < 0.001, \* p < 0.05  
 4) 制約変数からのパスは有意なもののみ示した。

感」を規定するとした因果関係モデルのデータに対する適合度は、図1のとおり、 $\chi^2(df) = 73.863(72)$ ,  $RMSEA = 0.014$ ,  $CFI = 0.999$ と統計学的な許容水準を満たしていた。パスの推定値およびその有意性検定の結果、「新たな気づきと突発的支援」は「自己成長感 ( $\beta = 0.530$ ,  $p < 0.01$ )」と有意な関係を示していた。また統制変数との間では、ヘルパー経験年数が「新たな気づきと突発的支援 ( $\beta = 0.256$ ,  $p < 0.05$ )」に、仕事継続意識が「自己成長感 ( $\beta = 0.390$ ,  $p < 0.01$ )」に有意な関連を示すことが確認された。

なお、各潜在変数（内省変数）に対する説明率は、「自己成長感」が42.9%、「新たな気づきと突発的支援」が13.7%であった。

#### Ⅳ 考 察

本研究で使用した尺度はクロンバック  $\alpha$  から信頼性と、統計学的な水準を満たしていたことより、構成概念妥当性が支持された。また、「新たな気づきと突発的支援」は「自己成長感」と関連がみられた。また、仕事継続意識が「自己成長感」に関連し、ヘルパー経験年数が「新たな気づきと突発的支援」に関連していた。このことから、ヘルパーとしての経験を積むと、利用者の様々な身体的、心理的状況を的確にアセスメントし、想定外に起こる状況の変化にもうまく対応できるという個別のケアを実践できる可能性があるといえる。また、自己の学びや成長の自覚には、仕事に対する評価は関係がなく、仕事を継続したいという意識が関連する可能性が確認できた。このような個別ケアは、利用者の個性が高い在宅支援ではより一層、必要な実践であり、介護者の自己成長をもたらすものと考えられる。

従来の研究において「自己成長感」は、外的な影響を受けにくく、個人の生きる姿勢が規定する部分が多いと考えられていた<sup>13)</sup>が、ホームヘルパーの支援の中でも重要とされる個別ケアの実践である、正確なアセスメントを行い、予測のつかない展開にも対応するといったケア実

践と関連していることが明らかになったといえる。また、因果関係に関しては、仕事継続意識と自己成長感とは、双方向の関係性があると予測できることから、今後は、対象者を拡大し、結果を再検証する必要がある。

#### 謝辞

本調査の実施に至り、ご協力いただいたA県訪問介護事業所の訪問介護員の皆さま、および各施設長の皆さまにこの場をお借りして感謝申し上げます。また、本研究の調査実施に対してご協力をいただきました大阪市立大学岡田進一先生、清水由香先生に深謝申し上げます。

#### 文 献

- 1) Hochschild, Arlie. "The managed heart, Commercialization of human feeling". University of California Press, 1983.
- 2) 西浦功. ホームヘルパーのアイデンティティー構築の困難性：感情労働としての在宅介護. 人間福祉研究 2005；8：43-54.
- 3) 佐藤ゆかり, 渋谷久美, 香川幸次郎, 他. 介護福祉士における離職意向と役割ストレスに関する検討. 社会福祉学 2003；44(1)：67-78.
- 4) 増田真也. ホームヘルパーの業務ストレスとバーンアウト. 介護福祉学 1997；4(1)：30-42.
- 5) 八巻貴穂. 訪問介護員の仕事のやりがい感に影響を及ぼす要因. 人間福祉研究 2005；18：137-46.
- 6) 広瀬美千代. ホームヘルパーの楽観的態度に関連する要因の検討：構造方程式モデリングを用いて. 厚生」の指標 2015；62(11)：25-31.
- 7) 広瀬美千代. 家族介護者のアンビバレントな世界－エビデンスとナラティブからのアプローチ. 京都：ミネルヴァ書房, 2010.
- 8) Hunt, C. K. Concepts in caregiver research. Journal of nursing Scholarship 2003；1：27-32.
- 9) Scheier, M. F., Carver, C. S., & Bridges, M. Distinguishing optimism from neuroticism (and trait anxiety, self-mastery, and self-esteem)：A re-evaluation of the Life Orientation Test. Journal of Personality and Social Psychology 1994；67：1063-78.

- 10) Scheier, M. F., Carver, C. S., & Bridges, M. W. Optimism, pessimism, and psychological well-being. In E. C. Chang (Ed.), *Optimism and pessimism: Implications for theory, research, and practice*. Washington, DC: American Psychological Association 2001; 189-216.
- 11) 信野良太. 自己成長感尺度作成の試み. 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集 2008; 11: 125-36.
- 12) 陶山啓子, 河野理恵, 河野保子. 家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析. 老年社会科学 2004; 25(4): 461-70.
- 13) 櫻井成美. 在宅要介護老人の介護者の介護経験－負担感, 肯定感とその関連要因の検討. 学校教育学研究論集 創刊号 2008; 21-30.
- 14) 広瀬美千代, 岡田進一, 白澤政和. 家族介護者の介護に対する肯定的評価に関連する要因. 厚生指標 2005; 52(8): 1-7.
- 15) 厚生労働省社会・援護局. 社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律案について, 平成19年3月. ([http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/dl/166-13a\\_01.pdf](http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/soumu/houritu/dl/166-13a_01.pdf)) 2017.10.10.
- 16) 古川和稔. 介護福祉におけるアセスメント530, III 介護福祉を支える諸領域, 日本介護福祉学事典編集委員会, 介護福祉学事典. 京都: ミネルヴァ書房, 2014.
- 17) 厚生労働省. 介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて (2008). (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei02.pdf>) 2017.10.16.
- 18) Seligman M, Steen T, Park N, et al. Positive Psychology Progress / Empirical Validation of Interventions", *American Psychologist* 2005; 60(5): 410-21.
- 19) 広瀬美千代, 杉山京. 「ホームヘルパーの主体的で柔軟性のある個別ケア」を測定する尺度の構造. *メンタルヘルスの社会学*. 日本精神保健社会学会 2015; 21: 13-22.
- 20) 豊田秀樹. 共分散構造分析 [入門編] 東京: 朝倉書店, 1998.
- 21) Muthen LK, Muthen BO. *Mplus User's Guide Fifth Edition*. Los Angeles, Muthen and Muthen, 2007.
- 22) 奥野洋子. 対人援助職におけるポジティブな変化について: 看護師の自己成長感の特徴について. *畿大学臨床心理センター紀要* 2011; 4: 19-30.
- 23) Hu L, Bender PM. Cutoff Criteria for Fit Indexes in Covariance Structure Analysis: Conventional Criteria versus New Alternative. *Structure Equation Modeling* 1999; 6: 1-55.
- 24) 山本嘉一郎, 小野寺孝義編. *Amosによる共分散構造分析と解析事例*. ナカニシヤ出版, 京都: 1999; 16-7.